

商家経営における主婦（女主人）と女中の関係についての考察*

— 1927年の商家の妻の日記から —

荒 木 康 代**

1. はじめに

本報告では、昭和2年の大阪船場の商家の妻の日記¹⁾から、商家経営における女主人と女中の関係について取り上げる。商家の主婦（女主人）と女中との関係については、中野卓が、商家の主婦の役割は、「女中を指揮して店員の衣食給与に当ることを重要な任務としているだけでなく、店員に対する人事管理の一半は主婦によって行われていた」（中野 1964：672）として、女中の「指揮」を「重要な任務」としてあげた。また、商家の未亡人の遺品が、親族や姻戚、分家別家のみならず、「既に縁付いたもと下女にも、住込中の手代丁稚や下女にもわたっている」点を指摘して、「生前にあった親密感ある交際の証拠として注意すべきであろう」とも述べている（中野 1964：562）。もっとも、商家の主婦の女中に対する「指揮」や「親密感ある交際」の具体的なあり様については、その資料的な制約もあってこれまでほとんど研究されてこなかった。本報告では、商家の主婦の役割と女中との人間関係の分析を通じて、主婦の女中に対する役割とともに、両者の「親密感ある交際」がどのように醸成されていったのかという点についても考察する。

女中についての研究は大きく分けて2つに大別できる。1つは、労働者としての側面からアプローチしたものであり、女中の労働条件や実態などについての研究である。そこでは、多くの場合女中は「人格ぐるみの支配と被支配」の「古い主従関係」にしばられた存在として記述されてお

り、「純粋な労務だけ」を提供する資本主義的雇用への移行の必要性が主張されていた（村上信彦 1983：113-137）。すなわち、ここでは女主人と女中の関係は、「支配」と「被支配」という観点からのとらえ方である。

もうひとつは、近代家族の進展との関連での女中研究である。大正期から昭和にかけて女中不足は深刻化していたが、それは資本主義の急速な発展により女性の働く場が広がったことと、新中間層の拡大によって女中への需要が急増したからであった。女中に対する需要が急増する一方で、女中への求職者は減少していった。このことに対して、奥田暁子は「労働心性」の変化の観点から、女中たちが「独立した女中部屋」や「自分の自由になる時間」などの「労働条件の改善」を求めようになったからであったと述べている。しかし、その一方で、大正11年の時点でも、女中が求めているものは、「家族の一員としての待遇」であった（奥田 2000）。

これに対して、家庭の中で女中の果たしてきた役割や主婦と女中との関係に着目したのが、清水美知子である。清水によれば、従来、「温情的な主従関係」のもとで「行儀見習いや家事習得」など「結婚前の修業を目的とした奉公」であった女中は、需要と供給のアンバランスによる女中難を背景に、収入獲得のための「職業としての女中」へとイメージの転換がはかられるようになった。もっとも、昭和に入ってもなお「結婚前の修業」という意識は根強く残っていた（清水 2004：20）²⁾。このように大正から昭和にかけての時期には、女中に「労働者」としての意識が芽生え始

*キーワード：女中、主婦（女主人）、商家

**関西学院大学大学院研究員

1) 対象とする日記は、1927（昭和2）年から1944（昭和19）までのもの10冊、10年分が現存している。今回取り上げるのは、そのなかから1927（昭和2）年、著者44歳のときのものである。

2) 昭和12年の京都市社会課の調査でも、「家事見習い」や「行儀見習い」の回答が6割を占めていた。

めてはいたものの、大勢としては旧来の家事、行儀見習いの意識の方が根強かったのである。このような中で主婦は、女中の不足によって多数の家事使用人をかかえる家庭の「監督者」から、女中とともに家事をする主婦へとその役割は変化した。さらに、戦後1960年代になると、女中が消えることによって主婦は女中を監督する責任から解放され、「気楽さを手に入れたかわりに、無給で働く家事労働者として位置づけられ」（清水 2000）るようになった。

以上の女中に関する研究は、女中の消滅と近代家族の浸透、女性の「主婦化」が平行して進んでいったことを教えてくれる。このことは、主婦の役割から家事使用人に対する「指揮」や「監督」といった役割がなくなったということであり、それはすなわち女主人としての「主婦」の消滅でもあった。ただし、ここで対象とされているのは、当時増加しつつあった新中間層が雇う女中であって、その多くは「座敷まわり」から「飯炊き」までを一人でこなさなければならない「一人女中」であり、主婦の側も始めて女中を雇う主婦が多数であった。女中の「使い方」がわからない彼女たちは婦人雑誌などに「使い方」の指導をあおぐ一方で、自らも「家事」をしなければならない主婦であった（清水 2000）。このように清水の描く女中と主婦の関係は、主婦と女中が1対1である新中間層階級であるが、現実には新中産階級以上に旧中産階級である商家で働く女中が多かった。

1930年の国勢調査によると、全国的女中数は697,116人（通勤含む）であり、これは有業者全体の7.4%にあたる。一方、大阪市では女中数は48,654人で、有業者全体の22%となり、全国に比べてかなり高かった。このような傾向は大阪に限らず都市一般の傾向であった。この当時、新中間層が急増して女中を必要としてはいたものの、当時まだ、女中の雇用者としてもっとも多いのは商業者であった。大阪市の場合は、新中間層といわれる銀行員、官吏、教員などが29.3%であるのに対して、物品販売、飲食店などの商業者が38.7%を占めている（大阪市社会部）。このような傾向

は京都市でも同様で、求人者は商業者が31.9%ともっとも多かった³⁾（尾高 1989:143）。

これまで、戦後の専業主婦の源流とも言える新中間層の主婦と女中の関係については、近代家族論の一環として研究されてきた一方で、多数の家事使用人をかかえて指揮監督が主要な役割であるとともに、その対象も家事にとどまらない、商家に代表されるような旧中間層の主婦と女中との関係についてはほとんど研究されてこなかった。このような観点から、本論文では商家を取り上げるが、女中と主婦の関係について考察する場合、商家の女中を取り上げる意義は大きい。というのは、新中間層の主婦と女中が産業の急速な発達によって現れた新しい関係であったのに対して、商家の主婦と女中の関係は旧中間層という従来から存在した関係だったからである。商家の主婦と女中の関係を考察することによって、女中とともに家事に従事する「主婦」へと移行する以前の「監督者」としての主婦と女中の関係について考察できると考える。

本報告で取り上げる商家は、すでに日記執筆時（1927年）には住居を郊外に移転し、店と家は分離していたとはいうものの、その2年前までは大阪船場にある店に居住しており、また幕末から続く商家であったという点で、旧中間層にあたる。家族は多くはないが本家や親族、生家その他との交際は多く、新中間層の主婦の仕事が家事に関することが中心であるのに対して、商家の女主人としての対外的な役割も多い。この点で、新中間層の主婦と女中との関係とは違う側面が見られる。もっとも、本日記からも、「女中の不足」や女中の「心性の変化」が窺える記述があり、主婦と女中の関係にも変化が現れていたことが推察できる。しかし、その一方で、両者の継続的な関係からは、「家事」の「監督」にとどまらない主婦と女中の関係を見出すことができたのである。

また、これまでの女中研究は若年の女中に焦点があてられてきたが、本報告では、中年の女中についても取り上げる。確かに統計的には住込みの若年未婚者が圧倒的に多く、1930年時点で、未婚

3) これらは、職業紹介所の統計によるが、当時女中の雇用は縁故や紹介が多く、職業紹介所は初めて女中を雇う雇用者による利用が多かったことを考えると、縁故などによる商家への女中の勤務はさらに多かったのではないかと推測される。

者が86.8%、30歳未満が86.6%、住み込みが96%を占めている（国勢調査による）。しかし、なかには中高年の女中や勤続年数の長い女中も少なくならずおり、勤続年数が30年、50年といったもの、二代、三代にわたって仕えてきたケースもあった（清水 2000：23）。さらに、戦前の商家の女中の中には、「権力」を持つ女性も存在したことが、商家の元店員によって報告されている⁴⁾。本日記からも、商家経営における中年女中の重要な役割が考察された。このような観点から、本論文では、女中に対する女主人の役割とともに、中年女中の役割についても取り上げることによって、「監督者」としての商家の女主人の役割と両者の関係について考察する。以下、日記の内容に入る前に日記の著者、杉村久子と杉村家について概説する。

2. 杉村久子と杉村家について

日記の著者、杉村久子は、1883（明治16）年に、五代友厚⁵⁾・豊子の三女として大阪中ノ島（現大阪市北区）で生まれ、17歳で大阪船場（現大阪市中央区）にある杉村商店の後継者である杉村正太郎と結婚した。結婚後は、大阪市東区（現中央区）の杉村本店兼住宅に居住し、三人の男子をもうけた。1925（大正14）年に本店を同区内で移転するとともに、住居を兵庫県川辺郡伊丹町（現伊丹市）に移し、さらに1931年大阪帝塚山（現住吉区）に移転、戦争中は兵庫県宝塚市に疎開し、終戦直後の1945年9月に亡くなった。

久子が嫁いだ杉村家は、幕末から「錫屋両替店」を営んできたが、明治期に入ると砂糖商に変わり、その後林業、貸家経営に転じた。また、久子の夫正太郎の父である先代正太郎は、五代友厚らとともにさまざまな近代的株式会社⁶⁾の創設に関与した。久子の夫正太郎も1895年、21歳で杉村

倉庫を創設している。しかし1925年には、経営不振のため杉村倉庫の社長を退き、杉村倉庫の経営からは引退していた。

本報告で取り上げる日記が書かれた1927年当時の杉村商店は、東区船越町に「杉村本店」があり、「林業部」と「土地部」があった。林業部は、若狭、丹波にかけての山林を有し、また土地部では貸家業を営んでいた。従業員は7名⁷⁾いたが、日常の経営は番頭に任せられていた。一方、伊丹の杉村家には、久子のほかに夫正太郎と長男（4月から）、そして、住み込みの女中がいた。夫はずでに経営から退いており、在宅することも多かった。また次男、三男は東京の大学に在学中であった。親族は、「別邸」に住んでいた姑と義弟三人（分家）がおり、また五代家の姉や義兄とも頻繁な手紙のやり取りと交流があった。この他に日記に頻繁に登場する人物としては、店と家を行き来して両方の用事に従事していた二人の男子店員や女中、日常的な交流のある知人の男女などがいた。日記には、家族の行動や身辺雑記、家の経済、来客、手紙や贈答のやりとりなど多岐に渡って非常に詳細に書かれている。日記に登場する人物は親族・知人友人や（元）女中や店員その他非常に多く、接する人々が多いため様々な出来事が頻発している。その中から、本報告では、女中に関する記述を取り上げて報告する。

1927年1月の杉村家には、住込みの若年の女中が3名と通勤の中年の女中2名がいた。また、船越町の店にも1名女中がいた。伊丹の家に住み込んでいた松・竹・菊のうち、もっとも勤務年数が長いのが3年目の松であったが、年齢は松、竹、菊ともに19歳であった。ただし、菊は2月始めに退職し、代わって竹の「学友」である梅（19歳）が2月から雇用されている。同年1月から3月にかけての日記には、女中の退職、採用面接のほかにも、女中の眼病通院、女中の娘の出産、女中の

4) 大阪船場の商家の元店員は、以下のように回想している「私は武田さんへお歳暮を持って行くのが楽しみやったけど、持っていったら奥女中さんの権力にはびっくりしたね。六十過ぎの年配の方、日赤の看護婦の総婦長みたいなもんです」（道修町資料保存会 1998：24）。

5) 五代友厚（1835～1885）大阪株式取引所創立者、大阪商法会議所（現大阪商工会議所）初代会頭。大阪産業近代化の指導者と言われている。

6) 関西貿易社、神戸棧橋株式会社など。

7) 杉村本店には店員が4名、福井県の林業事務所には3名いた（杉村家文書「昭和式年分俸給給料其他支払調書」）

夫の危篤など、女中に関しても様々な出来事が日記には記されており、それに対して手紙や見舞・相談など著者がなんらかの関与を行っていることがわかる。次節では、まず女中の採用と退職について日記の記述から考察する⁸⁾。

3. 女主人と若年女中の関係

1927年1月の杉村家には、松、竹、菊の3人の女中がいたが、この3人の女中に加え、新しく女中の梅を採用している。久子は梅を雇用するにあたって、1月17日に「めみえ」(面接)を行っている。久子は「玄関にてあひ、色々口頭試験をし、色々云ひきか」しているが、「竹とひきかへ大分ポンヤリと視察す」と日記に感想を記している(1/17)⁹⁾。この後、27日に梅は「入れ込み」(初出勤)となっており、久子は梅の父親に面会して、「本人のクセをきき色々参考の事など話し」(1/27)ている。両日とも本人および父親と面会しているのは久子一人であり、女中の雇用に関しては久子が独断で決定していたことがわかる。

女中の給与については、2月時点で採用3年目の松が18円、竹が12円、1月に採用したばかりの梅が12円であった¹⁰⁾。当時の女中の平均給与は15円であり、杉村家の給与も平均的だったと考えられる。女中の15円という給与は店員の30円、女工の23円に比べると低い¹¹⁾が、女中の場合は食費が別途支給されており、また住込みのため交通費や被服費等の経費がかからないことを考慮すると、一概には低いとも言えない。さらに杉村家では、女中に対して仕着せ及び賞与として、6月には帯とゆかた、12月には反物や帯などが支給されていた。12月6日に支給された反物等の金額は松17円96銭、梅10円21銭と、ほぼ1か月分の給与と同等の額である。この他に、1月に松は眼病のため7日間眼科に通院しており、梅は5月に皮膚科に通院しているが、この医療費と通院の電車賃も杉村

家の負担である。また、帰郷際の土産や家族の病気の見舞、折にふれての贈与など女中にかかる費用は決して少なくなかったと考えられる。女中としての労働時間は、大阪市調査では、16時間以上が7割近くを占めており、休日も月1回が多い(大阪市社会部労働課 1934)。杉村家の場合、起床時間、就寝時間とも不明だが、女中に対して「夜入浴早く十時過より休ま」(5/18)せているという記述からは、日常的に10時以降も仕事があったことが窺える。

このようななかで、2月8日に菊が「暇取りて帰る」ことになった。退職に際して久子は、菊の父親に対して、「本人の成績上らざる事、仕事も仕込まず、何の効も無き事多く、勝手なぜいたくなるをおぼえし、やや思ひくれてハ困る事など」を話し、菊に対しても「父親の前にて両親によく仕えよ、内に居りし間にきびしくしかりし事をいつ迄もわすれず、気をゆるさず仕事、勉強せよとしみじみ云ひきかせて」いる(2/8)。この退職が本人の都合によるものか、あるいは解雇なのか正確にはわからないが、日記には、久子の菊に対する教育が「何の効も無」く、不本意な結果に終わったことが記されており、女中に対する教育が、久子の役割として認識されていたとともに、その困難さについても窺うことができる。

1934年の大阪市の調査によると、女中の平均勤続年数は2年であるが、もっとも多いのは1年以下であり、一般に女中の勤続期間は短かった(大阪市社会部労働課 1934)。女中の退職理由には求人側、求職側双方の原因があったが、菊のような退職事由以外にも様々な原因があった¹²⁾。杉村家でも、2月の菊に引き続き、5月には竹が退職することになった。母親の病気で郷里へ帰っていた竹が戻ってこなかったのである。久子に面会に来た竹の父親と女中の松の話によると、「本人ハ仕事を勉強した」いが、「下働きのみにてつまらぬ」こと、また、「梅ヅケヅケ云ひ竹ハ何事もいはぬ」

8) 女中その他日記に登場する人物はすべて仮名。引用文中の人物名もすべて仮名に直している。引用文中の□は解読不能箇所。

9) () 内は日記記載の月日。

10) 梅は6月から15円に昇給している。松は同じである。

11) 女中、店員、女工の給与は1930年の大阪市平均による(大阪市社会部労働課)。

12) 大阪市調査によると、女中に暇を出した理由としては、病気のため、盗癖あるため、不品行などがあり、女中側が暇を取った理由としては、嫁入り、帰国、年期あけ、家庭の事情などがあった(大阪市社会部労働課)。

方で「梅との折合ひ」が悪いことなどが理由であった。このことに対して、久子は「ガッカリ」とするとともに、「今迄うかうかなり居し事を悔んでいる。竹の母親が病気であることもあり、「一先暇を取り度し」という父親の申し出に、「結局久子も突然ながら思ひあきらめ、暇取る事に承知し、帯や蒔絵袴など「凡三円五十銭」と、「母親へ綿モス代五円五十銭」を渡して父親を帰している（5/25）。

竹は「下働きのみにてつまらぬ」ことを理由のひとつに上げているが、「下働き」とは主に「飯炊き」、すなわち台所仕事のことである。従来の商家の女中には「上女中」と「下女中」があり、上女中は「座敷まわり」や奥向きの仕事、下女中は台所仕事「飯炊き」が主な仕事であった。杉村家では、若年女中はすべて「下女中」として雇用されているが、7月の日記には「小松を上へあげるつもり」（7/15）という記述が見られることから、数年勤めた後に「上女中」にしていたと思われる。しかし、竹にはこのような「下働き」は不満だったのである。竹は「仕事を勉強したい」と言っているが、竹の言う「仕事」が「飯炊き」などの台所仕事ではなかったことは明らかだろう。では、竹の考える仕事は何だったのであるか。それは「上女中」としての仕事だったと考えられるが、なかでも「裁縫」が重視されていたのではないかと推察される¹³⁾。というのは、裁縫を勉強したいという女中の希望が、1937年の京都市調査からも窺えるからである。女中になった理由として、「家事見習い」や「行儀見習い」と並んで「裁縫見習い」があり、裁縫という実用的な技術の習得が女中になる目的のひとつでもあった。竹の日常の仕事の中で裁縫の仕事もないわけではなく、久子が二人に裁縫を教えることもあった（2/22）ものの、日々の仕事の中心は台所仕事であり、このことが竹にとっては「下働きのみにてつまらぬ」と感じられたのである。裁縫が、女中になる理由の一つになっていたのは、「嫁入り」のための「修業」にとどまらない理由があったが、このことについては後で詳述したい。

さらに、竹にとって不満だったのは、同僚の梅

との関係であった。このことに対して久子は十分監督できていなかったことを悔やんでおり、女中の採用から退職のみならず、女中同士の関係の調整なども女中を雇う女主人にとって重要な役割であったことが推察される。

久子は、午後2人を交代で休ませたり（5/18）、「芝居」を見に行かせる（5/17、5/30、6/4）など気をつけており、女中の処遇に対する様々な配慮が見られるが、それでも女中の退職を防ぐことはできなかった。竹の退職に「ガッカリ」した久子は、竹が「主人がこわしと云ひ居りし事」や「梅も辛抱出来るか否やふ明なり」など、中年の女中の糸から聞き、「いよいよ召使のふ自由を恐かんし、いやになる」と記している（6/2）。主婦と女中の考え方の違いも含め、雇う側と雇われる側の需給のミスマッチのなかで、女中を雇うことはますます困難になっていたのである。

このように女中の不満や雇い主の不満、また女中間の関係など様々な原因により、一般に女中の平均勤続期間はきわめて短かったが、なかには数年勤めた後、下女中から上女中を経て結婚に至る事例も少なくなかった。それが、次の松の退職である。1925年11月に17歳で住込み始めてから2年半勤めた松は、1928年4月結婚により退職した。久子は「祝と慰労の品物」として羽織紋付を渡している。もっとも当初久子は、結婚祝いに「鏡台九円七十銭と針箱五円」を予定し注文していたが、松の親から「先につとめし内より祝に鏡台はり箱を貰ひしよし通知」があったため羽織紋付に変えたのである。このことに久子は「ガッカリ」と記しており（1927/4/15）、女中の嫁入り道具を揃えることが、久子にとっての楽しみでもあったことが窺える。

以上、杉村家の4人の若年女中について述べてきたが、ここからは若年の女中と女主人である久子との関係を読み取ることができる。松のような結婚にいたる事例がある一方で、菊や竹の事例からは、従来求められてきた「家事見習い」や「行儀見習い」のための「奉公」が必ずしも、女中を勤める女性たちにとって自明ではなくなっていたことを物語っている。久子の目からは、菊が当時

13) 久子も日記の中で「仕立て」などの裁縫を「仕事」と書いている。

の消費社会化の進行の中で「ぜいたく」をおぼえ、「家事見習い」という「仕事」を怠っていると写っている。一方、竹の場合は逆に「仕事」を覚えることができないことが、不満の原因のひとつになっているのである。このような女中の様々な意識の変化のなかで、従来の女中の使い方が、女中の意識の変化に対応しなくなっており、女中の監督指揮はいつそう困難になっていたことがわかる。日記からは、久子が女中に対して様々に気を使っている様子が読み取れると同時に、女中の教育や監督が久子にとって重要な役割と認識されていたことがわかるのである。

もっとも、杉村家でも女中の勤続年数が短かったことが観察されるものの、女中の退職によって女中と杉村家の関係が絶たれてしまうわけではなかった。次節では、退職後の女中と久子の関係について考察する。

4. 退職後の女中と久子の関係—親密と歓待

5月に暇をとった竹はその後も完全に退職したわけではなく、梅や松が「やぶ入り」で手薄のときや年末年始の忙しい時期には手伝いに来ていた。日記には、8月24日から9月13日までと12月24日から正月にかけて、その他に6月にも数日手伝いに来ていることが記されている。このように女中が退職後も単発的に手伝いに来ることがあった一方で、結婚などでやめた女中が久子を訪問することも少なくなかった。

たとえば、7月3日に元女中のAが14歳の義妹を連れて「入嫁後始めて挨拶」に来ている。久子は、「妹も上らせ二人一緒に話し、蓄音機きかせて中（ママ）食させ」た後、土産を持たせて帰らせている。久子はAの嫁ぎ先が裕福ではあるものの「気がね多き様子」と記しており、気にかけている様子が窺われる（7/3）。また、結婚後2度目に訪問してきた元女中のBに対しても、「有合せにて食事させて後居間にてあひ」「入嫁先の事」を「色々尋ね」、土産として本人にはゆかたを、気難しいと聞いた義父のためには素めんを渡している（8/6）。このような元女中の訪問や久子の対応、女中の婚家に対する詳細な記述からは、

女中という仕事を通じての久子との関係が単なる労働契約としての雇用関係にとどまっていないことを示している。「入嫁後三年なるにまだ」子供ができないことや「今迄かくし居しを始めて恥かしかり打ちあける」（5/6）元女中からは、結婚退職を経て日常的に指揮する一されるという関係から離れることによってむしろ久子との心理的距離感が縮まっている様子を見ることができるのである。

AやBのような訪問の他にも元女中がやって来る理由があった。Cは、親族の所持する掛軸の「ねたんふ明の為杉村へき、合せ」に、「四年ぶりに」「突然」やってきた。これに対して、久子は道具の鑑定については「一向ふ明なれどとに角き、合せ見る故預かる」「返事ハ分り次第はがき出す」と約束をしている（5/4）。8月に礼に来たCに対して久子は、「蓄音機きかせ」「夕食させ」「入浴」させているが、「おち付てゆるゆる遊」ぶCに対して、久子は「余りづうづうしきに内心おどろく」と記している（8/8）。

このように、杉村家と女中との関係は退職によってそのまま途切れてしまうものではなく、退職後も折にふれての訪問などでつながっていた。AやBのように元主人である久子との間に「親密感ある交渉」が窺える場合もあれば、Cのように道具の鑑定という実利的な目的のために訪れる場合もあった。久子はその「づうづうしき」に驚くものの、その訪問がどのような理由であれ、その頼みを受け入れている。ここには元女中を歓待することに対する久子の義務感さえ窺える。すなわち、退職後も途切れることなく引き続き維持されている女主人と女中との関係からは雇用関係の中断によっては切断されない両者の関係性を見ることができるのである。このような両者の関係の連続性は、いったん退職した元女中が再び女中に復帰するということにもつながっていた。2月に船越町の店にやってきたDは、「嫁の病気全快せしば又々つとめたし」（2/25）と、再び女中として杉村家で働くことを久子に頼んでいる。さらに退職後の臨時手伝いや女中への復帰以外に、仕立屋として久子から仕立物を請け負うという関係への移行もあった。

たとえば、5月に暇をとった竹は、その後臨時

に手伝いに来る以外に、仕立物も頼まれている。すでに女中在職時から竹の母親が仕立物を請け負っていたが、退職後は竹も母親とともに久子から仕立物を頼まれるようになったのである。前節で述べた竹が裁縫を勉強したがっていたのは、裁縫がこのような収入の糧になるからでもあった。久子の日常には、仕立物関係の記述がきわめて多い¹⁴⁾が、仕立の注文先として日記に名前が多く出てくる者としては、竹の母の他に、3名いる。うち1名は杉村商店の店員の妻であり、もう1名は杉村家の彼岸の法事(11/22)の手伝いにも来ているため元女中であったのかもしれない。このように、久子が仕立を頼むのは、杉村家の雇い人や女中の親族、また元女中に限られていた。以下では、日記から久子が仕立をたのむようになった経緯が詳しく記されているもう一人であるFの事例について考察する。

Fの名前が始めて出てくるのは、4月9日である。杉村家の元女中であるGが嫁のFをつれて「挨拶に来」たのである。Gの名前は、6月14日の久子の母の三回忌の供物の配り先として記載されており、Gが久子の母にも仕えていた、あるいは五代家と何らかの関係があったことが推察される。この日、久子は、GやFと「居間にて長々話し」、寿司を出し、夫の正太郎も帰宅後「上天にて話し」をしている。Gの嫁のFが、「本人着物の紋付も仕立てし由」をきいた久子は、早速「仕事」をたのみ、「その内使いに持せ遣す」ことを約束している(4/9)。その後、久子は4月13日に「Fに仕立始めて持せ遣」し、その後頻繁にFに仕立てを頼んでいる¹⁵⁾。このような仕立に対して久子は、5月3日に「先月分仕立代」を「請求」するよう使いに伝言させているが、5月27日に届いたFからの手紙には、「仕立代ハ決して頂くべきニあらず」と義母Gからの伝言が認められていた。それは、Gの杉村家あるいは久子に対する「栄分のご御恩被しのつもり」だからであった(5/27)。これに対して久子は、「モス裕一円(略)

安すぎるが心付けを遣わすつもり」と記し、さらに翌28日には、「仕立て代書出し通り四円を包み□きニ送りけれど此度ハこれ丈にし以後ハ遠慮無く□出すやう」と伝えていた。

「御恩被しのつもり」というGの言葉からは、かつて勤めた杉村家や久子に対する「奉公」という意識が見られ、Gにとって杉村家あるいは久子との「主従関係」が窺える。その一方で、居間で久子や正太郎と長々話したり、寿司を出したりする久子や正太郎の行動からは、元女中に対する歓待の姿勢が見られる。このような元女中に対する歓待は、Gに限らず訪問してくる元女中のほとんどに対して見られるのである。このように、女中と久子、あるいは杉村家との関係は退職後も決して途切れることなく長く続いていた様子が見られるとともに、元女中に対する歓待も日記から窺えたのである。

次節では、杉村家の2人の中年女中、糸と琴について考察する。中年女中と久子との関係には、若年女中とはまた異なる側面を見出すことができたのである。

5. 久子と中年女中の関係

(1) 女中の紹介と後見、情報提供

杉村家には、松、竹、梅のような若年の住み込み女中以外に通勤女中の糸と琴、また船場の店には米がいた¹⁶⁾。彼女たちの正確な年齢は不明だが、糸は1月から2月にかけて、娘の出産のため横浜に滞在していた。また、琴は1911年のメモに久子の息子の看病をしている記載が見え、また米には学生の息子がいたことから、3名とも久子と同年代あるいはそれ以上だったのではないかと推測される。本節では、特に日記に記載されていることの多い琴と糸を中心に取り上げる。琴も糸も共に、その働きかたは若年女中の場合と比べてきわめて不定期である。日記から両者についての記載を抜き出したものが表1と表2であるが、どち

14) それは、家族、親族の着物の用意が久子の役割だったからである。

15) 日記には、4月から7月までの3ヶ月間のうち11日、Fに仕立を頼んでいる記述が見られる。

16) 日記では、松、竹、梅は「女中」や「下女」「台所」と記していることがあるが、糸や琴、米は常に名前で記しており「女中」などとは書いていないため、彼女たちを女中と呼ぶのが適切かどうかはわからないが、ここでは便宜上女中としておく。

らも杉村家の用事をしていると見られる日数はきわめて少ない。琴の場合は、9月26、27日と10月14日から22日までの間の5日間、北の家の留守番¹⁷⁾をしている他は、特別な来客の際の接待や手伝いが数度見られる程度である。一方、糸の場合は、5月14日から18日までと8月14日から21日までの北の家の留守番と単発的な届け物程度であるが、それと平行して、久子の甥宅である芦屋の五代家の手伝いもしている。給料については、琴の場合隔月ごとの20日前後に給与15円が支払われている¹⁸⁾糸の場合は、1月以前は月給制で月20円であったが、2月以降は娘の出産や夫の病気によりほとんど不在であったため、日割り計算となっている(5/18)。

このように女中として杉村家で仕事をしている日数は少ないものの、両者が杉村家に来ている日数ははるかに多く、日記における両者に対する記載も多い。それは、彼女たちと久子の関係が単に家事手伝いをする女中と女主人という関係にとどまらなかったからである。彼女たちの役割は、むしろ家事手伝い以外のところにあった。そのひとつが、女中の紹介である。松や菊は琴の紹介で杉村家に入っており、竹や梅は同郷(河内)の糸の紹介あるいはその関係によるものであった。つまり、杉村家では、琴と糸が女中を紹介する役割を担っていたのである¹⁹⁾。さらに、彼女たちの役割は、ただ単に女中の紹介をするだけではなかった。菊の退職に際して久子は菊に「暇取る時の品」を「二階へよびて渡」している(2/5)が、この品物を琴に預けており、また、両親に代って琴が久子に品物の札に来ている(2/7)。ここからは、琴が単なる女中の紹介者ではなく、退職するまでの保証人や親に代わる後見人としての役割も果たしていたことが窺える。また、彼女たちは、若年女中やその他の使用人についての情報を久子に伝えるという役割も担っていた。たとえば、6月2日、久子は女中の竹の退職理由や北の家の管

理人である森(72歳)が暇を取って隠居したがっていることを糸から聞いている(6/2)。ここからは、若年の女中や雇い人が直接久子に言いにくいことを、糸が仲介あるいは代弁していたことがわかる。糸は森が暇を取った後の次の管理人の紹介についても言及している。また、彼女たちは久子の相談相手にもなっており、たとえば琴は松の結婚祝いの品物を久子に代って探しているし、店の女中である米は、女中の退職の品物について久子の相談にのっている(3/5)。このように中年の女中は、女中の紹介・世話をする他に、久子と使用人との間の仲介や情報の提供、さらに久子の相談相手などにもなっており、杉村家における久子の人事管理の補佐的役割を担っていたといえる。このような中年女中に共通して見られる役割の他に、それぞれに独自の役割もあった。次に琴と糸それぞれの久子との関係について考察する。

(2) 接待役として補佐—久子ときみの関係

現存する久子日記関係史料²⁰⁾の中で、琴の名前が発見される最も古い日付は1912年である。この年、久子の次男正二郎(当時6歳)が入院しているが、琴に「看護料として金拾二円渡す」というメモが存在する。このことから、すでに琴は15年以上杉村家に勤続していることになる。表1に見られるように、琴の杉村家での仕事は、「北の家留守番」以外では、5月11日の「来客2名の給仕、接待」と6月8日の「土居兄来訪、夕食給仕手伝い」、7月22日の「土居姉と野村義姉来訪のため、朝より手伝い」のみであり、松や竹のような日常の台所仕事はほとんど無い。琴が手伝いに来るのは来客時のみなのである。たとえば、5月11日に二人の女性が来訪している²¹⁾。二人の来客の「突然の来訪」に「狼狽」した久子は、急いで琴を呼び寄せている。久子は「何となく座敷におちつかずうろうろとなし、座敷にて食事出し中お琴に給仕させおき、居間にて一人食事して後座敷

17) 「北の家」とは、店員や女中の家族が来た時に泊まるための家である。6月から北の家の管理人をしていた吾助の妻が入院したために、代わりに留守番を久子が琴や糸に頼んだのである。

18) 日記の後ろの金銭出納帳による。

19) ただしこの2名のほかにも女中を紹介する人物として、日記には数名の名前が見られる。

20) 残存する日記は1927年からであるが、1910年から1925年にかけての手帳やメモが数点残っている。

21) 来訪客と久子との詳しい関係は不明だが、2名の名前は6月14日の久子の母五代豊子の三年忌の供養の配り先として日記に記されていることから、久子の母と関係があったことが推察される。

へ行てあい手」をしている。久子は「給仕ニお琴よびよせ」ることによって「都合よく接待す」ることができたのである(5/11)。また、9月2日から4日まで某老女が杉村家に数日滞在しており、このときもお琴が相手をしているが、それは主に「花遊び」(花札)の相手であった(9/2)。このように、日記に見られる琴の役割は、来客の話し相手や遊び相手が中心であり、来客の接待に関して久子が琴によって補佐されている様子を見ることができる。琴が遊び相手をしていたのは来客だけではない。久子の夫正太郎の「接待」も琴の役割であった。ある日の久子は、仕立物を持参してきた琴を引き止めて「丁度主人無為の為久子より進めて二人にて遊ばせ置」、久子は「安心して二階にて休みよく眠」ったことを記している(9/1)。また、久子を交えて「花遊び」をすることも頻繁にあり、ここからは、琴が久子にとって気の置けない相手として認識されていたとともに、久子の代わりに夫正太郎の遊び相手を勤める、久子にとって重要な存在でもあったことが窺える。このような遊び相手としての琴の姿からは、杉村家との「親密感ある交渉」を窺うことができるとともに、「遊び」を含めた接待が琴の仕事の中心であり、また「遊び」と「仕事」の境界があいまいである様子も浮かび上がる。一方、もう一人の中年女中の糸は、琴とはまた異なる相貌を見せる。

(3) 親密感と反発—糸と久子

糸がいつから杉村家の女中をしていたかということについては不明である。ただし、表2からわかるように、糸はほとんど毎月、久子の母(五代豊子—1925年没)の墓参りに行っている。糸の墓参りについては、5月13日、7月13日、8月14日、10月11日に記述が見える。これは、6月14日が久子の母の命日だったからである。この年の6月14日に久子は、「三年忌祀り物」を各所に配っているが、河内にいる糸にも小包で送っている(6/14)。このことから、糸と久子の母との関係も推測される。また、糸は杉村家の手伝いをするだ

けでなく、芦屋の五代家(久子の甥宅)にも手伝いに行っており、また横浜滞在時には、東京の五代²²⁾宅も訪問(1/17)していることから、久子の実家五代家とのつながりが深いことがわかる。

1927年は糸の夫の病気や死亡ということがあり、杉村家での糸の仕事は5月14日から17日にかけての大掃除と北の家の留守番のみである。しかし、日記には糸に関する記載は多く、そのほとんどは糸の夫の病状や糸の行動についてなどであった。糸は、1月から2月にかけて娘の出産のため横浜に滞在していた。糸の郷里は河内であり、夫は河内に住んでいるが、日記には「糸横浜行不在の為不自由」(1/20)という記述が見えるため、それまでは杉村家に住込みであったか、あるいはもっと頻繁に杉村家で働いていたと考えられる。すでに述べたように、琴と同じく糸も女中の紹介という役割を担っており、竹や梅は糸の紹介あるいは関係による。また、6月まで杉村家の北の家の管理人をしていた森は糸の義兄(夫の兄)であった。さらに、横浜にいる糸の娘も久子とは既知の間柄であり、かつて杉村家で女中をしていたのかもしれない。糸が娘夫婦とともに帰阪した時には北の家に宿泊しており、久子や杉村家との親族ぐるみの関係が見られる。

1月から横浜に滞在していた糸は、夫が危篤のため2月6日に帰阪、同8日に伊丹に挨拶に来ている。糸の夫の病状はきわめて重く、これ以後、日記にはその病状について頻繁に記述が見える²³⁾。森から糸の夫(森の弟)が危篤と聞いた久子は早速「ぶとう酒一本凡百五、六十銭と果物」(2/3)を用意し、糸に対しても夫の死亡後は「よくつとめ三十五日間みて後帰るやう」に「申聞かせ」ている(2/19)。その後、「葬式用意衣類取り出しに」北の家に帰ってきた糸に対して、久子は「金貳円を包みて渡し、病人死亡後直に伊丹へ戻る事」を止め、娘夫婦が横浜へ帰るときに同行して「一ヶ月か二ヶ月か保養して当方都合よき時よび返すと約束し」ている。これに対して糸は、「喜びて命に従」う一方、二月三月四月の三か月の月給を「辞退」したため、久子は「改めて横

22) 久子の父五代友厚の養子となって五代家を継ぎ友厚の長女武子と結婚した五代龍作・武子宅で、龍作は父に早く死に別れた久子の父代りでもあった。

23) 2月3日から7月26日の糸の夫死亡時までの日記の内約12日間に記載が見られる。

浜行の旅費として廿円」を渡している(4/29)。この後、糸の夫の病状は小康状態となったため、5月14日から18日にかけて杉村家の大掃除を手伝いに来た糸に対して、久子は「(日手当として一ヶ月廿円の割り一日七十銭と見て本日迄七日間分)五円」を包むとともに、糸の夫への見舞に五円を包み「メて十円を遣」している(5/18)。その後、7月26日に糸の夫が「昨夜終に死亡せし由」通知があったことを聞いた久子は、河内へ戻る糸に「五円式包五代と杉村より、為に杉村より丸政いなり寿し五十、いちまうの花寿し四十」とを遣したのである。このように日記からは、糸の家庭の事情に対する久子の様々な配慮と援助が見られるのである。その一方で、糸に対する久子の不満も日記からは窺うことができる。

2月9日に糸は横浜から伊丹に戻ってきているが、糸が疲れのため北の家で休んでいるとばかり思っていた久子は、糸が大阪に出かけたことを知って、「大阪なれば何か用事無きかときゝ来りてもよきにとふ平に思」い、「不快」に感じている。また、伊丹の家では、疲れて帰った糸に対して久子の夫正太郎が入浴を勧めたため、糸が入浴したところ湯がぬるく、夕食の用意で多忙な梅や竹に夫が湯をたかせているのを見て、久子は「ふ快」に感じている。「長々東京行勝手な事し、帰り来りて早々お客のやうにふろたかせるなど余り気まま過る」と風呂からあがってきた糸に不満を述べた久子は、「地かぬ出て来りし事と不快」(2/9)と感じるとともに、夫に対しても「余り気を付けて貰わぬよう注意す」と日記に記している。

日記からは、糸に対して様々な私生活の配慮をする一方で、「気まま過る」糸に対する久子のいらだちを見ることができ、このようないらだちにもかかわらず、その後もなお糸に対する配慮や支援は同様に続けられている。久子と糸の関係には、命令する者とされる者という関係とともに、支援する者、される者という関係が付随している様子を見ることができるとともに、女中に対する支援が久子にとって規範として認識されていることも窺える。さらに、糸と久子との間には長期間にわたる雇用関係があるとともに、久子の母親や五代家との関係にまで広がっている両者の関

係が存在する。そして、このことが、久子が糸に対して配慮、支援しなければならないという規範を強化させていたのではないかと考えられる。だからこそ、久子是不快を感じながらも糸に対する支援を省略することはできなかったのである。

このような久子の女中に対する配慮や支援といった規範意識とそれにもとづいた行動は、その他の女中についても同様であり、また元女中に対しても同じような事例が見える。さらに女中や元女中の親族にまでも、その対象は広がっている様子が日記から窺える。たとえば、久子は琴の親族であるろくの病氣見舞いに訪れるとともに、ろくが「入浴長々とせぬ」ということを聞き「ふろを入らすべくよひに遣」しており、この日の夕方、ろくは、杉村家にやって来て「廿日ぶりにて入浴し喜ひて色々話し」て帰ったのである(1/20)。

久子が接する女中の背後には、女中の家族や親族さらに女中の郷里の人間関係があり、両者の関係はそのような多くの人物を含めての関係であった。久子と女中との関係は決して一対一の関係のみにとどまるものではなかったのである。そして、このような久子と女中、元女中、その親族、仕立の依頼先などの女性たちのつながりは、年末の久子の次の行為に象徴的に表れている。

久子は、12月12日から16日にかけて衣類の買物のために大阪の店に泊りこんで、各百貨店を回っている。買物の商品は久子や家族の衣類もあるものの、その多くは女中を始めとして久子を取りまく女性たちへ渡すための反物や帯などであった。日記に記されている名前は、松、竹、梅、琴、糸、米などの杉村家の女中のみならず、仕立を頼んでいる女性や元女中、店員の妻、松や竹の母、さらにろくの名前も見える。さらに、義母(夫の母)のいる「別邸」の女中や東京の五代家の女中、久子の姉(土居)宅の女中にまでその対象は及んでいたのである。

6. 結論

以上、杉村久子日記から、杉村家の女中と久子の関係について見てきた。商家の主婦の役割は、1人の女中を相手にともに家事をする新中産階級の主婦の役割とは異なり、多数の女中の指揮であ

り監督であるとともに、彼女たちの生活への配慮や支援も含まれていた。

若年女中との関係からは、女中の教育や女中間の人間関係の調整が、女主人の役割と認識されていることを窺うことができたが、女中の意識が様々に変化している時代背景の中で女中の監督指揮に困難を感じている様子もかいま見られた。しかし、その一方で、両者の関係が単なる雇用関係にはとどまっていなかったことが日記から窺えた。人を雇うことによる両者の関係は、雇用期間中のみ限定されるものではなく退職後も持続しており、その後も長く引き続き関係として両者に認識されており、さらに次代に引き継がれる関係でもあったことが事例から観察されたのである。

一方、中年の女中は、女中の紹介や後見、久子の相談役など久子を補佐すると同時に、久子に代わっての来客の接待など女主人の代理としても、商家経営における重要な役割を担っていたことが見出された。しかし、それゆえに久子との間に齟齬が生じることもあった。それは、中年女中と久子の関係が女主人と女中として「命令する—される」という関係であるとともに、久子にとっては生活面でも配慮し、援助すべき対象であり、さらに両者の関係の長さから久子や夫正太郎との関係も緊密になっていたことによる。それは、ある場合には「不快感」や「しがらみ」に転化することもあったが、それにもかかわらず、久子の女中、元女中に対する配慮や支援が消滅するものではなかった。それは、彼女たちに対する配慮や支援が商家の主婦にとっての規範として久子に認識されていたからである。そして、このような規範は女中、元女中に対してだけではなく、その家族、親族をも含むものであった。また、同様に女中の側からも、女中として勤めることは久子や杉村家との関係にとどまるのではなく、多くの場合、久子の実家である五代家や久子の親族との関係も含むものであった²⁴⁾。すなわち、久子と女中との関係は決して1対1の関係におさまるものではなく、両者の背後には、その家族や親族、また郷里などの人間関係があり、そのような多くの人物を含めて両者の関係は成立っていた。だからこそ、

久子が配慮し、支援すべき対象も女中や元女中だけでなく、その家族、親族、また久子の親族の女中にまで広がっていたのである。女主人と女中との関係の背後には、このような家族・親族・地域との関係が複雑に絡み合っていたのであり、それに加えて、過去から引き継がれている両者の関係の蓄積もあった。このような両者の緊密な関係が、「親密感ある交渉」を生み出していたのである。

参考文献

- 荒木康代 2007年「戦前期の商家の『主婦』(女主人)についての考察—大阪船場の『ごりょんさん』の事例から」『ソシオロジ』51-3 社会学研究会
道修町資料保存会 1998「先達の語る道修町—座談会」『道修町の古老に聞く』道修町資料保存会
石原桂子 1998「杉村家文書—「久子日記」をめぐって—」『大阪の歴史』増刊号 大阪市史編纂所
濱名篤 1998「明治末期から昭和初期における『女中』の変容」『社会科学研究』49-6
京都市社会課 1937〔1996〕「京都市に於ける女中に関する調査」『日本近代都市調査資料集成5 京都市社会調査報告書〔Ⅱ〕12』近現代資料刊行会
村上信彦 1983『大正期の職業婦人』ドメス出版
中野卓 1964『商家同族団の研究』未来社
奥田暁子 2000「女中の歴史」『女と男の時空』藤原書店
尾高煌之助 1989「二重構造」『日本経済史6 二重構造』岩波書店
大阪市社会部労働課 1934〔1996〕「女中の需給状況について」『日本近代都市調査資料集成3 大阪市社会部調査報告書37』近現代資料刊行会
清水美知子 2000『「女中」イメージの変遷』岩波書店
清水美知子 2004『<女中>イメージの家庭文化史』世界思想社

24) 日記における女中についての記載からは女中と久子の実家の五代家との関係は多く見られるが、杉村家の分家(夫の弟)との関係はほとんど見られなかった。

表1 日記記載の琴の行動

月 日	琴の行動
2月7日	午後4時半来り、夕食まで主人と話。菊の品物の礼
4月21日	おろく京都養生行きに同行2ヶ月。一昨日帰る。
5月7日	朝10時過見舞の礼に来る。蓄音機聞いて帰る。
5月11日	来客2名の給仕、接待。来客帰宅後4人で遊ぶ。
5月29日	下女如何かと尋ねに来る。U、吾助らと遊ぶ
6月8日	土居兄来訪、夕食給仕手伝い。
6月19日	夜、五代母3回忌志の礼に来る。
7月9日	Uら5人で遊び。
7月14日	飯炊き女について説明に来る
7月15日	琴へ仕立物託す。
7月22日	来客のため、朝より手伝い。夜11時帰る
8月1日	琴へゆかたと五円遣す。夜礼に来る。
8月10日	夜、U、主人、久子ら4人で遊ぶ
8月12日	朝10時来る。お菊手伝いの件について相談
8月21日	お琴呼び、お菊の件承知。
8月22日	水密とバナナ持参。
8月23日	正二郎正三郎上海行き、表で見送り
8月31日	お菊の件といろいろ話
9月1日	仕立物持参。主人と遊び
9月2日	お袖の「花あわせ」の相手
9月3日	お袖の「花あわせ」の相手
9月4日	主人とUと3人で遊び
9月9日	主人とUと3人で遊び
9月21日	土産物の礼
9月24日	見送り。主人とUと遊び
9/26—9/27	北の家留守番
10月3日	お琴、母の25年忌供物の礼にあんびん持参
10月4日	夜8時から正太郎、久子、U、琴の4人で遊び
10月14日	留守番。夜7時よりお琴、正太郎、Uと3人で遊ぶ
10/18—10/20、22	お琴、北の家の留守番に遣す
10月28日	夫、Uと3人で、夜7時から遊び
11月1日	主人呼び寄せ、Uと3人で夜から遊び
11月8日	台所にて話
11月27日	3時、H、U、主人と食事、遊び。

表2 日記記載の糸の行動

月 日	滞在場所	糸の行動
1月1日	伊丹	昨夜遅くなり台所で眠る
1/?—2/7	横浜	娘の出産手伝うため横浜在
2月6日	横浜→河内	夫の病気看病
2月8日	河内→北の家	横浜より帰郷挨拶
2月9日	北の家→大阪→北の家	大阪へ買物。船越町の店に立ち寄る
2/10—3/11	河内	夫の病気看病
3月11日	河内→北の家	娘とその夫と孫同伴で挨拶
3月12日	北の家→芦屋(五代)→北の家	芦屋へ安産見舞
3月13日	北の家→大阪→河内	吾助の羽織船越町へ届けさす
4月29日	河内→北の家→河内	病人悪しきため、葬式衣類取りに来る
5月12日	河内→北の家	3時帰り来り。病人良き方。4時北の家
5月13日	北の家	久子の母の墓参り
5/14—5/18	北の家	大掃除、ふろたき、買物、使い
5月19日	北の家→河内	孫はしかの為河内へ帰る
6月2日	北の家→河内	久子と話。竹、森のこと聞く。夕方河内へ
6/2—7/13	河内	夫の病気看病
7月13日	河内→阿倍野→芦屋	久子の母の墓参り。芦屋泊
7月14日	芦屋→伊丹→大阪	昼前帰り来り。仕立物届けさす
7月15日	大阪→河内	河内へ帰るとき、竹の仕立物持参さす
7月17日	河内→芦屋	芦屋で大掃除手伝い
7月18日	芦屋→伊丹→芦屋	夕帰り来り、夜食後命じて芦屋へ帰す
7/18—7/20	芦屋	大掃除
7月20日	芦屋→伊丹→河内	河内より連絡。夫の病気悪し、河内へ帰る
7月26日	河内	夫死亡
8月14日	河内→阿倍野→伊丹、北の家	久子の母の墓参り後、伊丹へ
8/14—8/20	北の家	北の家留守番。20日河内へ帰る
9月21日	芦屋→伊丹→河内	朝9時後突然来り、午後2時帰る
10/1—10/10	芦屋	芦屋手伝い
10月11日	芦屋→伊丹→阿倍野→河内	朝11時来る。芦屋の話聞く。午後墓参り
10月31日	芦屋→伊丹→芦屋	芦屋手伝い中、4時半来り。夕食後芦屋へ
11月17日	芦屋→伊丹→芦屋	芦屋五代みえ子の使い。林檎持参
?—12/2	芦屋	芦屋手伝い
12月4日	河内→伊丹、北の家	衣類北の家に出しに来り。夕食させ、帰る
12/7—12/?	河内→伊丹、北の家	命により、手伝いに来る。夜。遊び

An examination of the housewife and housemaids relationships in the merchant family in Japan

— From the diary of the wife in a merchant family in 1927 —

ABSTRACT

The aim of this paper is to consider the role of wives and housemaids in a merchant family in the 1920s “Ie” family management system. Some researchers point out that the wives of merchants before World War II had a “command” role over housemaids in the actual management of merchant family affairs.

In this paper, I will explore the life of the female employer in the merchant family. Wives had the role of not only “command” but also that of “care” over housemaids. I will use the diary of a wife of a merchant in the Osaka area to illustrate these roles.

Many housemaids in the 1920s were young and were live-in helpers; therefore, much research has focused on young housemaids. However in this paper I will focus on middle-aged and older housemaids as they had important relations and relationships with housewives in the merchant family.

The relationships between the housewife and housemaids continued even after the housemaid’s retirement; for example, housemaids would visit the housewife or help her at family memorial events. The relationships between the housewife and housemaids was not one to one. The housewife took care of housemaids and the the families and relatives of housemaids. Also, housemaids helped in the home of her female employer’s parents or sisters.

In conclusion, I will show that these relationships continued for a long time, and were extensive and involved other family or relatives.

Key Words: housewife, housemaids, merchant family